

\*\*\*\*\*

## 世界と日本の真実 ブログより

トーマス・コーエン博士の講演 動画文字起し

2020-04-04

# 「トーマス・コーエン博士 コロナについて語る」

こういう見方をすると人類の危機は自らが招いたと分かります。

さて、私の持ち時間はあと 10 分あります。ここまで辿りつけるかどうか分かりませんが、ここでコロナウイルス全般について触れずにはられません。

もし皆さんが話を聞きたいならですが（聴衆から聞きたいという声）

そうですね、繰り返しになりますが、もしドルフ・シュタイナーを知っていたら、この試練への答えをご存じでしょうが、それでも具体的に解明しなければなりません。

1918 年に最大のパンデミックであるスペイン風邪が大流行した後で、シュタイナーはそれがどういうことだったのかと聞かれました。シュタイナーはこう答えました。

**「ウイルスは単純に、我々の細胞の有毒な排泄物です。ウイルスは我々の DNA や RNA の破片がいくつかのたんぱく質と共に細胞から排出されたものなのです。こうしたことは細胞が毒に侵されると起こります。何も原因はないのです」と。**

まず最初に考えてください。

皆さんが著名なイルカのドクターで何百年という長期にわたり、北極圏でイルカの研究をしてきたとします。

イルカは健康でしたが、ある時電話がかかってきて「フレッド、たくさんのイルカが北極圏で死んでいる調査に来てくれないか」と頼まれます。

その時に質問を一つするとします。皆さん、手を挙げてください「遺伝子構造を調べるためにイルカを診たい」という人は 何人いますか？ 誰もいないですね。くだらない質問でした。

それでは「このイルカとあのイルカがウイルスを持っているかを調べさせてください。伝染病かもしれませんから」と言う人は？

あちらの男性ですね。

それでは、このような表現で失礼しますが「この水に誰か糞をしましたか?」という質問です。エクソンバルディーズ号の原油流出のようにです。誰かいますか？ 全員ですね。そうです、それが起こったことでした。

**細胞が毒に侵されて、自ら浄化するために我々がウイルスと呼ぶ破片を排泄したのです。現在のウイルス理論であるエクソソームや、アメリカ国立衛生研究所の所長がウイルスの複雑さについて述べている最新のトークを見ていただくと、ウイルスは何者かという現在の考え方と今の話が完全に一致していることが分かります。**

私が子どもの頃の話で、まさに当てはまる話があります。子供の頃、家の外には湿地帯がありました。カエルが湿地帯いっぱいに住んでいて、夜になると陸に上がって来るため、窓をテープで目張りしなければなりません。春になると大騒ぎでしたが、そのうちにカエルは全部いなくなったのです。遺伝病だったと思う人はいますか？カエルがウイルスに罹ったと思う人は？誰かが殺虫剤を水に入れたのだと思う人は？それが起きたのです。**病気は被毒です。**ワクチンの理由も・・・これはちょっと飛ばします。

それでは、1918 年になにが起こったのでしょうか。**過去 150 年に起きた大きなパンデミックの時は毎回、地球の帯電による量子飛躍(クォンタムリープ)があったのです。**1918 年、1917 年の晩秋には、電波が世界中に導入されました。生体系が新たな電磁場にさらされる時は、いつでも被毒が起こり、一部は破壊され、残りはいわば仮死状態になるのです。

興味深いことに、その生体の寿命は延びるのですが、病状は悪化します。その後第二次世界大戦が始まり、次のパンデミックは、レーダー機器の導入で世界中が覆われた時でした。地球全体がレーダー場で覆われたのです。人類は初めてそのような状態にさらされました。

1968 年は香港風邪でした。その時、地球は初めてバンアレン帯という保護領域を持ちました。これは要するに太陽や月、木星、その他の惑星からの宇宙場を統合し、地球に住む生命体にまき散らすのです。人類は放射能を排出する周波数の衛星をバンアレン帯の内側に配置し、その後 6 か月以内にウイルスによる新たなパンデミックが発生しました。**ウイルス性とされた理由は、人が被毒したし、毒を排出してウイルスのように見えたので、インフルエンザによるパンデミックだと考えたのです。**

1918 年のパンデミックの際は、ボストン保健局が伝染性を調査することにしました。信じられないような話ですが、彼らは何百

人もインフルエンザ患者の鼻水を吸い出し、これをまだ罹っていない健康な人に接種したのです。ですが接種された人で、具合が悪くなる人は一人もいませんでした。これを何度も何度も繰り返しましたが、伝染病であることを実証出来なかったのです。馬でも試しました。明らかにスペイン風邪にかかっている馬の頭に袋を被せ、馬が袋の中でくしゃみをしたら同じ袋を次の馬に被せるということをやりましたが、病気になった馬は一頭もいませんでした。

アーサー・フィルステンバーグの「見えない虹」(ArthurFirstenberg"ThelInvisibleRainbow") という本にこのことが書かれていますので、興味のある方はお読みください。

地球の電化を年代順の一つずつ追って行き、どのようにして半年以内にインフルエンザの新しいパンデミックが世界中で発生したかが書いてあります。

普通はどう説明するでしょうか。どのようにカンザスから2週間で南アフリカに到達するでしょうか？世界中で同時に同じ症状が現れたのです。当時の移動手段は馬や船であったにも関わらずです。説明はなく、「何が起きたか分からない」とだけ述べられました。しかし考えてみてください。

皆さんのポケットに入っていたり、手首に付けている機器の電波や周波数を使って、日本へ瞬時に信号を送り届けることが出来ますね。信じない方がいるかもしれませんが、我々は電磁場に囲まれており、秒速で世界中とコミュニケーションが取れるのです。ただ注意を払っていないだけなのです。

ここで最後に指摘したいと思います。地球の電化という劇的な量子飛躍が過去6か月の間にありました。皆さんよくご存じですね。5Gと呼ばれています。

**今では放射線を発する衛星が2万個もあります。**同じように放射線を発する物は皆さんのポケットや手首にもあり、いつも使っていますね。それは健康にはそぐいません。このように言うのは申し訳ありませんが、健康にはよくないのです。それは水の構造を破壊する機器です。皆さんの中に、「そうは言っても我々は電氣的な存在ではないし、ただの物質だ」という人がいたら、その人は心電図や皮膚電位図、あるいは神経伝達検査には構わないでください。我々は電化した存在であり、化学物質は電氣的刺激によるただの副産物なのです。

最後に質問するので当ててください。世界で初めて5Gで完全に覆われた都市があります。それはどこでしょうか？(聴衆から「武漢」という答え)その通りです。ですからこうしたことを考え始めると、我々は今、実存的危機に直面しています。人類がまだかつて出会ったことのないものです。ここで旧約聖書のような

予言をするつもりはありませんが、これは未曾有の出来事です。**何百何千という衛星が地球を覆い尽くしているのです。**

ところで先ほど言おうとしたのですがこれはワクチンの質問とも実は関係があります。こうしたことを思い知らされた出来事がありました。一年ほど前に私のところにある患者が来ました。まったく健康で、サーファーでブローカーもしていました。そして電気技師として裕福な人のためにWi-Fiシステムを設置する仕事もしていました。電気技師の死亡率は非常に高いのです。でも彼は元気でした。ところがある時、腕に怪我をしたので、金属プレートを入れました。その3か月後、男性はベッドから起き上がることが出来なくなり、不整脈も出て完全に崩壊してしまいました。

影響を受け易いかどうかは体に入っている金属の量と、細胞内の水質と関係があります。**人にアルミニウムを接種すると、接種された人は、増加した電磁場を吸収する受容体となるのです。これがまさに今、我々が体験している「種の荒廃」ともいべき大混乱です。**

最後にもう一つ、ルドルフ・シュタイナーの言葉を引用したいと思います。ちなみに、これが書かれたのは1917年頃で、今は違う時代です。

**「電氣的な存在がなかった時代、大気に電氣的影響が渦巻いていなかった頃」**

この話は1917年のことです。

**「人間でいることはたやすかった。それだけに今、とにかく人間でいるためには、百年前と比べてはるかに強く靈的能力を伸ばすことが必要である」**

**靈的能力を高めるにはどうしたらよいかということ。**

\*\*\*\*\*ここまで

「高橋清隆の文書館」ブログより

## 空は本当に落ちてくるの？ 5G衛星が落ち始めたら、そう見えるだろう

元記事 <http://stateofthenation.co/?p=10023>

2020年3月27日

アーサー・ファーステンバーグ

私がこれを書いているとき世界、あるいはその非常に大きな部分は、事実上の戒厳令の下にある。新型コロナウイルス (COVID-19) という提案された敵から守るため、学校は休校になり、航空機の飛行は取り止めになり、劇場やレストランは閉鎖され、教会は閉じ、夜間外出禁止が敷かれ、外での集会は禁止され、国境は閉鎖され、人々は互いに接触したり近寄らないよう指示され、あらゆる肌の表面やドアノブ、人の手は消毒を厚く塗られる。そして、住民は自宅「軟禁」を命じられた。そして、米国からノルウェー、ボリビア、オーストラリア、エジプト、インドネシアに至るまで、人々は大した抗議もしないばかりか、熱意を持って従った。

私の受信トレーや留守録は矛盾した「情報」であふれた。そのほとんどは検証不可能で理解できないもので、科学的、政治的見地から好ましく仕立てられている。誰も全体像を見ていない。全ての原因による死亡率がほとんどの国で減少傾向にあり、決して上昇していないことに誰も気付いていない。

1918年の「スペイン風邪」の原因は何か？

ウイルスの感染爆発への恐怖が世界を席卷したのは、これが初めてではない。われわれは以前にも予測を聞いたことがある。いずれも現実にならなかったが、豚インフルエンザや鳥インフルエンザ、サーズ、マーズ、西ナイルウイルス、ジカウイルス、エボラ出血熱が数百万人を殺すだろうと。注目すべきは、これら脅威は皆、インターネットが広く行き渡った通信手段として対面接触に取って代わり、画面上の文字と絵が現実に置き換わった後に起きていること。今日、脅威は進行し、人々はついに、周りで起きていることを認識するよりも、世界を閉鎖したがつている。私はこれらの予測に全く根拠がないとは思わない。全ての病的興奮の背後には、1918-1921年の「スペイン風邪」であった大惨事が繰り返されるのではないかという恐れがある。結局、この1918年のインフルエンザは世界人口の3分の1を病気にし、推定5000万人が死んだ。

しかし、1918年のインフルエンザについては、広く知られてない重要な事実が幾つもある。

- 1918年のインフルエンザはウイルスが原因ではなかった。
- 1918年のインフルエンザは伝染性でなく、人同士の直接の接触によって広がったわけではない。
- 1918年のインフルエンザは、兵士たちが無線電信の訓練を受けていた米軍基地で始まった。それは最先端の無線基地を装備した1万隻の米軍艦に載って世界中に広がった。世界のほとんどの地域で受信できるほど強力な初の24時間体制のラジオ局が米軍の作戦展開するニュージャージー州ニューブランズウィックで放送を開始した1918年9月に一層多くの死者を出すようになり、それによって現代の無線通信が始まった。

1918年のインフルエンザの伝染の真相を証明するための米国公衆衛生局に勤務する医師らの努力は英雄的だったが、はっきりと度重なる失敗に終わった。1918年11、12月と1919年2、3月に、彼らは100人の健康な無償協力者に、次の方法でインフルエンザを感染させようと試みた。

- 彼らはインフルエンザの入院患者の口や鼻、喉、気管支から採った分泌物を無償協力者の鼻や喉、目に入れた。
- 彼らは病人から採った血液を、無償協力者に注射した。
- 彼らは病人から採った粘液物質をろ過し、無償協力者の皮下に注射した。
- 彼らは無償協力者を病人と握手させ、会話させ、5分間至近距離で向かい合わせた。次に、無償協力者が5センチ離れて息を吸い込んでいる間、病人にできる限り激しく息を吐かせ、それから無償協力者の顔目掛けて咳を5回させた。

とにかく、これらどの実験でも、無償協力者は誰も病気にならなかった。健康な馬にインフルエンザにかかった馬の分泌物を感染させる同様の試みも、同じく明白な失敗に終わった。

これらの実験や、1918年のインフルエンザについての他の事実は、一般のインフルエンザについてと同様、拙著『見えない虹—伝記と生命の歴史』(原題“The Invisible Rainbow: A History of Electricity and Life”AGB Press 2017, Chelsea Green 2020、未邦訳)の7、8、9章に徹底的に議論され、文書化されている。

**歴史を見れば、インフルエンザは予測できない病気で、警告も予告もなく発生し、その出現と同様に突然、不思議に消え、数年あるいは数十年再び見られない。1889年に現れた照明や動力のための交流電気が世界中に広がる以前、インフルエンザは季節病としてこの地球に存在しなかった。1889年、インフルエンザで押し掛けられた多くの医師たちは、以前にその症例を見たことがなかった。しかし、インフルエンザは以後、地球上のどこでも欠いたことがない。**

われわれの社会に深く染み込んでいるため、人々にとって手放すのが最も難しい認識は、病気は細菌やウイルスと同じだというもの。世界をこのように見るのは、生活共同体を戦場と見なすように間違っている。はい、インフルエンザと関係する呼吸器のウイルスは存在する。いいえ、ウイルスは病気を引き起こさない。インフルエンザは呼吸器作用に症状があろうがなかるうが、ほとんど全ての器官に影響し得る神経系の病気である。

特に今、世界はこれらのことを知る必要がある。1918年のインフルエンザはウイルスが原因でも、伝染で広がったのでもなく、無線通信が全世界に突然広まったことによって引き起こされたことがひとたび理解されれば、その病的興奮は沈静化するはずで、世界は正常に戻り、無線技術から免れた必要な仕事に従事できる。心臓病や糖尿病、がん(『見えない虹』11、12、13

章)は主に、われわれの貴重でもろい世界にあふれてきた携帯電話やその電波塔、無線アンテナ、レーダー基地、防犯システム、ベビーモニター、無線コンピュータ、その他無線装置と社会基盤が放射する電波の海によって引き起こされている。

## コロナウイルスと5G

私はコロナ疾患が5Gによって引き起こされていると思うかどうか、尋ねられてきた。私の答えは：直接ではない。しかし、1918年との類似点は印象的である。1918年のインフルエンザの原因はウイルスでなく、地球そのものの電磁環境を変えるほどの無線技術の急増だったことを思い出してほしい。

1918年冬、春、夏のインフルエンザの第1の穏やかな波は、地域的範囲を限定され、日に数時間限定で運営される無線通信基地局の数千への急増によって引き起こされた。3年間続いた第2の波は、人類の3分の1が病気になり、病気になった人の10%が死亡した。これは無線が電信から音声に、限定された時間から終日に、短距離から惑星規模に発達したのが原因だった。

これは今日起きていることと似ている。5Gははるかに高い周波数やはるかに巨大な周波数帯、はるかに強力な電力を使いながら、地球への無線攻撃を新しい水準に上昇させている。コロナウイルスの第1波は、5G基地局の莫大な急増を伴っていたが、それぞれは地理的に限定された範囲にとどまっていた。これは程なく、短距離から地球規模に、そして電離層への間接的な攻撃から直接的な攻撃にエスカレートし、今年と来年には、数千の5G衛星が稼働するようになる。

現在の感染爆発の電磁的性質への手掛かりは、興味深い観察に由来する。コロナウイルスの検査で陽性を示した人々の3分の2は、嗅覚を失っていた。それはしばしば単なる症状にすぎず、他の点では病気ではなかった(「新型コロナ感染の印としての嗅覚の喪失」、原題“Loss of sense of smell as marker of COVID-19 infection,” ENT UK)。嗅覚の喪失は旧ソ連で無線病と呼ばれた病気の古典的兆候で、今日では電磁波過敏症と呼ばれる。それはしばしば、他の点では健康な個々人に無線をさらしたときの症状にすぎない(「UHFの影響にさらされた人の嗅覚調査」、原題“Investigation of the Olfactory Sensitivity in Persons Subjected to the Influence of UHF,” Ye. A.

Lobanova and Z. V. Gordon, in *The Biological Action of Ultrahigh Frequencies*, A. A. Letavet and Z. V. Gordon, eds., Moscow 1960, JPRS 12471, pp. 50-56)。

もう一つの手掛かりは、「不整脈や低血圧、頻脈、感染者に付随する心血管疾患の割合が高いこと」を含むコロナウイルス疾患の心臓血管系に対する頻繁に報告される影響である。これは、雑誌『心臓学』(“Cardiology Magazine”)2020年3月6日

号に報告された。これらは、無線にさらされた古典的影響でもある。

3つ目の手掛かりは、対人接触を避けるために各国政府が採っている手段に関わりなく、現在の感染爆発の深刻さが驚くほど多様であることだ。例えば、なぜイタリアはコロナウイルスの疾患が7万4000例で、日本はたった1200例なのか？日本で確認された症例の80%は、ほかの誰にも感染していない。東京は3800万人を抱える世界で最も人口稠密(ちゆうみつ)な首都に含まれるが、ほとんど疾患がない。イタリアでは全国的な隔離と社会封鎖がある一方、日本では疾患に対する措置がほとんど講じられていないにもかかわらず。日本では隔離がなく、酒場もレストランもクラブも忙しく、にぎわっている。お寺は混雑し、公園は花見をする人々がたくさんいる。地下鉄は満員で、人々は仕事に行くが、疾患は広がっていない。

日本は中国と交流が密で、2月1日まで(武漢のある)湖北省からの到着便も止めてなかった。日本はイタリアより高齢者が多く、喫煙率も高い。

この疾患の性質もこれで説明できるだろう。日本のほとんどは火山性で、日本直下の地殻の伝導率はイタリア直下のそれより高い。それ故、日本の住民はイタリアの大半の住民より接地が良く、周囲の無線による影響を受けにくくなっている。イタリアの火山性地域(シチリア島やカンパニア州)は他の地域よりコロナウイルスの発生率ははるかに低い。

日本に住むパトリス・オームスピーが数年前、私に話したのは、米国にいるときは6メートル離れた所から携帯電話を感じることができるのに、日本にいると3メートル近付かないと携帯を感じないということ。私は同じ理由で、サンタフェに住んでいる。ここでは全ての携帯アンテナを感じない。なぜなら、サンタフェ直下の地殻の伝導率は非常に高いからだ。

新型コロナウイルスと呼ばれる呼吸系のウイルスの起源や重症性に関わりなく、5Gの広がりは現在の感染爆発に大きな役割を果たしている。恐れや社会的孤立、社会封鎖は、ウイルスがこれまでなし得たよりもずっと大きな損害を生活の質に与えている。社会はこの微生物への強迫観念を乗り越え、地上と宇宙で無線技術がもたらしている緊急事態に目を向けるときである。

※まほろば編集部注：記事は昨年4月、3月付のものであり、その後の状況等を考慮いただく必要があります。また、コロナと5Gに関しては、ウイルス原因説と相反する面もありますが、未だ新型コロナウイルスが遺伝子特定されていない事実とあわせ、会長の今月号「コロナと生きる—最終章」にもあるように「病気は免疫システムの反応である」というベジャンや森下先生の説を裏付けるものでもあったと考えられます。また、5Gはこの5月末にかけて全国各地でエリア拡大を完了しており、さらにエリアを広げる見通しです。